

第8回



入選作品原稿

令和6年8月
(一社) 家の光協会 普及企画部

■ ■ 総 評 ■ ■

J Aの教育文化活動は、『家の光』をはじめとする「家の光三誌」を積極的に活用しながら、J A女性組織の活動はもちろん、くらしの活動や支店での協同活動等を展開することによって、組合員と役職員、地域の人たちとのつながりをつくることをめざしています。このことは、今、J Aグループにとって重要な取り組み課題である「組織基盤の強化」につながると考えられます。第8回となる家活グランプリですが、コロナ禍の規制が緩和されるなかで、対面の活動を復活して創意工夫を凝らし、ときには他の部署とも連携しながら取り組む実践事例が多く寄せられました。3名の審査委員により、①組織・地域の特性を踏まえ、創意工夫して「家の光三誌」の記事を活用しているか、②教育文化活動や記事活用の効果と広がりがみられるか、③豊かな表現力を持って活動内容が表されているかを評価の基準として、応募があった14作品の審査がおこなわれました。厳正な審査の結果、各賞を決定しましたが、いずれも甲乙つけがたい力作ぞろいで、惜しくも今回の選には漏れた作品からも多くのヒントが得られました。こうした実践事例にも学びながら、家活の輪がますます広がるとともに、より多くの応募がなされることを願っています。

審査委員長 摂南大学 教授 北川 太一

【第8回「家活グランプリ」審査委員】

審査委員長 摂南大学 教授 北川 太一

審査委員 家の光専門講師 佐久間 幸子

家の光協会 代表理事専務 木下 春雄

※肩書きは審査会当時・敬称略

* 目 次 *

【最優秀賞】

- 私たちの教科書（テキスト）は『家の光』
島根県 JAしまね 横山 丈訓さん・・・・・・・・・・・・・・ 3

【優 秀 賞】

- 家活が築く！安心して暮らせる豊かな地域社会
茨城県 JA水戸 田山 絵美さん・・・・・・・・・・・・・・ 5

- 『家の光』が結ぶご縁
島根県 JAしまね 長島 敬子さん・・・・・・・・・・・・・・ 7

【佳 作】

- 声を聴くことを心がけて!!
愛知県 JAあいち中央 岩井 ゆかりさん・・・・・・・・・・・・・・ 9

- 生活担当ではないからこそできる家活
福井県 JA福井県 笹原 久美子さん・・・・・・・・・・・・・・ 11

- JAの礎『家の光』
鹿児島県 JA南さつま 西尾 あかねさん・・・・・・・・・・・・・・ 13

※「家の光用字用語集」にもとづき、本文の表記を一部変更しています。

※所属は応募当時のものです。

私たちの教科書（テキスト）は『家の光』

島根県JAしまね 雲南地区本部 企画総務部 ふれあい課

横山 丈訓

『家の光』は、私たちの教科書です。「活動」の教科書に留まらず、「組合員教育」の教科書、時には「事業推進」の教科書としても活用できます。『家の光』が具体的にどのように活動の核となり、私たちにとって重要な役割を果たしているのかをご紹介します。

長年、女性部では読書会や手芸、料理教室に至るまで『家の光』を「活動の教科書」として活用しており、活動に欠かせないツールとなっています。そんな『家の光』を活用した活動を、私たちは「ルミエール活動」と呼んでいます。「ルミエール」とはフランス語で「光」を意味し、「より親しみを持てる」と女性部員に好評です。また、独自の助成金制度を設けるなど、さらに活動が活発になるように工夫を凝らしています。

また、支店協同活動として、職員と女性部が協力しながら「来店したくなる支店づくり」に取り組んでいますが、ここでも『家の光』が手本となっています。例えば、支店の花壇に花を植えたり、敷地の清掃を行ったり、また、年に一度の来店感謝デーでは、『家の光』を使ったインテリア作品を展示するなど、支店の魅力づくりに挑戦しながら、来店者におもてなしの気持ちを伝えています。

最近、女性部では2023年5月号の『家の光』キエーロコンポストの記事を活用した普及活動にも力を入れています。女性部員とJA職員でコンポストを作り支店にも設置しましたが、コーヒーやお茶、弁当などから出る生ごみの処理が可能になり、職員からも好評です。

JAの役職員は、協同組合運動の理念を広める重要な役割を果たしています。その手段として、長年『家の光』が大きな役割を果たしてきました。しかし、『家の光』の普及に限らず、時代や組織の変化により、各事業の推進が以前よりも難しくなっています。このような状況の中で、『家の光』は単なる読書や趣味の雑誌にとどまらず、組合員教育の重要な教科書であることを、職員に深く理解し再認識してもらうことが、組織にとって非常に重要だと考えています。

そこで、昨年8月に、「『家の光』は組合員教育の教科書」というキャッチフレーズを掲げ、職員向けの教育文化セミナーを動画視聴方式で開催しました。地区本部長と家の光協会の職員の解説と、『家の光』協会がYouTubeで配信してい

る「教えて！『家の光』を普及する理由」をまとめてセミナー用動画にしました。このセミナーは非常に好評で、受講した職員からは、「『家の光』を薦める理由がよく理解できました！」と数多くの感想が寄せられました。職員の組合員教育への理解がより深まり、『家の光』の普及活動への意識が高まったことを実感しました。

また、女性部員との協力を得て、『家の光』の普及活動にも本格的に取り組んでいます。女性部員が手紙を作成し、知人に配ったり、外勤日に職員が案内するなどして、女性部と協力して『家の光』の普及に取り組んでいます。今年度の女性部の目標は、女性部員657名の購読率38%から41%（3%増）を目標にしています。

『家の光』がJAの事業推進に繋いだ事例として、昨年、『家の光』記事を活用して「お金の教室」というセミナーを開きました。共済や信用の担当者と連携した、初めての試みでした。

講座は最初に、『家の光』12月号の特別付録「得するお金10の習慣」を用いて節約術やお得な金銭管理方法について丁寧に解説しました。その後、共済担当の職員が老後の介護や認知症への備え方について、信用担当の職員がいま注目の投資信託について、「お金」に関するトピックを3つの異なる視点から解説しました。

開催前は、テーマが固いことを心配していましたが、『家の光』記事のわかりやすい内容のおかげで、スムーズな流れで学んでいただくことができました。結果として、この講座で『家の光』の新規購読2件、共済への具体的な相談、さらには新規に2件の投資信託契約を獲得するなど、大きな成果を得ることができました。

『家の光』を用いたこの取り組みが他事業推進へと波及し、横断的な部門間連携の強化に貢献したことは大きな成果です。この企画に関わった信用と共済の担当者からは、「また『家の光』を使ったセミナーを開催しましょう」という前向きなフィードバックがありました。これは『家の光』が「JA事業においても重要な役割を果たし事業を後押ししている」という一例となったと思います。

このように、『家の光』は様々な形で私たちの活動を支え、地域社会におけるJAの存在感を高めるための核となっています。『家の光』を軸とした活動を通じて、更に多くの人々にJAの役割や価値を伝え、地域社会の発展に貢献していくことが私たちの願いです。これからも『家の光』と共に挑戦を続けながら、地域コミュニティの豊かな未来のために努力を重ねて参ります。

家活が築く！安心して暮らせる豊かな地域社会

茨城県 JA 水戸 総務企画部 企画課

田山 絵美

JA 水戸の 3 ヶ年計画の 1 つである「持続可能で安心して暮らせる豊かな地域社会づくりの実現」に向けて私は何ができるだろう？と考えた時に今の私ができることは女性部の皆さんと一緒にいくらしの活動だと考えました。

私は営農資材センターで 5 年間、2 支部の女性部事務局を担当したのち本店に異動となり、女性部の本部事務局や女性大学事務局、くらしの活動の担当をして 4 年目を迎えます。1 年を通して小学生への農業体験や管内の名所を巡るウォーキング教室、女性大学では女子力アップ講座や教養講座など様々なカリキュラムでくらしの活動に深く関わっています。そして、そんな私の活動を支えてくれているのが『家の光』です。「さて、次はどんな活動を始めようかなあ〜。何をテーマにした講座を開こうかなあ〜。」と活動を計画する際には、まず『家の光』をめくるところから始めます。くらしの情報源として幅広い内容が掲載されている『家の光』は活動の参考書にピッタリなのです。

2022 年の 12 月、JA 水戸では全職員に向けた『家の光』学習会を開催しました。9 年前、私がそうだったように「『家の光』は購読しているが、実際に熟読したことがない。」「家の光が日頃の業務にどう役立つのかわからない。」といった若手職員の声が多いのが実情だったからです。「持続可能で安心して暮らせる豊かな地域社会づくりの実現」を果たすため、まずは職員の意識改革から始めなければならないと思い計画したのです。実際に学習会を開催してみると、「営農情報や料理レシピ、手芸が載っていたのは知っていたけど、実は金融事業や共済事業などの JA 事業についてのコーナーや福祉や生活の知恵について載っているとは知らなかった。」「今後、組合員や地域住民との対話活動に活用していきたい。」といった感想が聞こえてきました。勉強会をきっかけに全職員が『家の光』を知り、次に女性部をはじめ組合員や地域住民へ協同の心を伝え、そして活用することでくらしの活動の活性化へと繋げていきたいです。

次に進めたのが JA 水戸女性部『家の光』愛読運動の拡大です。もともと私たちの女性部では年間目標を掲げ『家の光』愛読運動を行なっていましたが、昨年度、JA 水戸の女性部長が全国家の光大会へ出場し、茨城県女性組織連絡協議会の会長に就任したのをきっかけに女性部活動の活性化と部員増員を目的に、更なる愛読運動の拡大に取り組みました。まずは女性部役員・事務局の役員会での学習会の実施や

『家の光』編集部へ視察見学を行い、改めて『家の光』を知ることから始めました。次に女性部員を対象とした家活に取り組みました。女性部に人気の料理教室として2015年9月号別冊付録の米粉レシピを活用した米粉の料理教室や、手芸教室として2017年11月号掲載の折り紙でつくる落ちない三角しおりづくり、2021年9月号掲載の新聞エコバッグづくり、2023年1月号掲載のネコのボンボンストラップづくりなどを行いました。活動はどれも大好評！特に新聞エコバッグづくりはSDGsの観点からも好評で、「継続して毎年続けて欲しい。」「作ったエコバッグを直売所に置きたい。」といった意見があがり、家活を通して19冊の増部に繋がりました。そして、これらの活動をJA水戸の広報誌に掲載することで、「どうしたらこの活動に参加できるの?」「作り方を教えて欲しい。」との問い合わせをいただき、女性部活動と『家の光』に興味をもってくださる方も増えたのです。

今、私には2つの目標があります。1つ目は、コロナ以前に行っていた『家の光』購読者を対象に実施していた特典イベントの開催や夏休みに親子100人で行っていた料理教室、秋に管内の200人超の小学生を対象に行っていた農業体験や新米と地産野菜たっぷりの豚汁などを振舞った2つのちゃぐりんフェスタ、女性部員の日頃の活動成果を発表する文化活動発表会などの活動を復活させることです。購読者が無料で参加できる特典イベントではおせち料理やクリスマス料理など『家の光』に掲載されているレシピを活用した料理教室を毎年11月に開催し、好評をいただいています。

2つ目は、茨城県は全国でも農業が盛んな県で、美味しい農畜産物がたくさんあります。ちゃぐりんフェスタの復活にも繋がりますが、将来を担う子どもたちへの食農教育活動をブラッシュアップして、安全安心な食の普及と地産地消への取り組みをさらに強化していくことです。JA水戸では毎月管内の小学校にちゃぐりんを寄贈しています。今後は学校に出向いて出前授業を行い、ちゃぐりに掲載されている食のクイズなどを活用し、楽しみながら食の大切さを子どもたちに伝えていきたいです。

「持続可能で安心して暮らせる豊かな地域社会づくりの実現」のために今わたしができる活動は女性部の皆さんと一緒に家活が繋ぐ仲間たちと手を取り合って地域に根差した活動を続けていくことだと確信しています。

『家の光』が結ぶご縁

島根県 J Aしまね 出雲地区本部 朝山支店

長島 敬子

様々な場面で家の光三誌を活用して活動していたなか、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、コロナ禍の時期は集まることもできず、それまで行っていた持ち寄り読書も残念ながら中止しました。しかし、いずれコロナがおさまったらまた始めよう、そのために今まで通り家の光を購読し、出来そうな情報や、やってみたい情報を集めておこうと南部ブロックで話し合いました。

令和3年、ブロック内のひとつ乙立地区では高齢者とのふれあいの集いが中止となり、家の光図書「野菜スタンプの布巾作り」を提案し、J Aの助け合い組織やすらぎ会会員と一緒に、200枚余りの布巾を作り高齢者にプレゼントしたところ大好評でした。久しぶりに集まっての活動で部員もとってもうれしそうでした。そして翌年の11月には、家の光12月号「ゆずを愉しもう」の記事の中の入浴剤を作りました。地区内のゆず加工場で廃棄されるゆずの皮と種を譲り受け、切って干して入浴剤にするもので、高齢者の方に喜んでいただいたのはもちろん、他の支部やゆず部会から作り方の問い合わせがあったり、他の支部へも拡大していきました。これを機に少しずつ集まって、読書会をしたり、バザーをしたりしました。もちろん蓄えた情報も交換し合って。南部ブロックでも家の光を使つての料理教室やハム作りを感染対策に注意しながら再開しました。

令和4年から支店再編により店舗の無人化が進み、家の光に掲載されていた「J Aの空き店舗でサロン開催」などの記事の話題も多くなりました。ブロック内でも現在までに4店舗が無人となりました。その内の乙立店と稗原支店は令和5年2月末で無人店舗になる事が決まり、それぞれ女性部員から感謝のイベントを開こうとの声が出ました。乙立店では2月20日から4日間午前中のみですが、「ありがとうウイーク」を実施することになり、女性部・やすらぎ会共同で「おもてなしカフェ」を開催しました。朝7時からミニモーニングサービスも実施するなど4日間でのべ200人の来場があり、会場で書いていただいたメッセージカードには、「これからもこんなカフェ続けてほしい」というメッセージが沢山寄せられました。女性部員達からも「ぜひ続けたい」という声があがり、令和5年5月から毎月1回「乙立ふれあいカフェ」として、有料でお菓子付きのコーヒーや抹茶を提供し、地元に憩いの場を提供しています。背景には家の光3月号の記事「女性部が引き継ぐ地域唯一の店」の記事がありました。「みんなが集う拠り所」「地域の暮らしと笑顔を支える場」まさに私達女性部員の思いと重なりあったものでした。また、このカフ

エでは季節の移り変わりを大切にしようと、家の光やちゃぐりんを使ってお菓子を作ったり、包装紙のごみ入れを作るなど活用しています。夏休みには、子供達におもてなし体験をしてもらう「こどもカフェ」を開催し、家族や友達など沢山の方に来ていただきました。体験した子供達もとてもうれしそうで、終了後女性部から、家の光「おむすびカーニバル」のおむすびが提供されました。ケチャップは地区内で生産され、規格外となったトマトを使って手作りしたものです。この「乙立ふれあいカフェ」がきっかけとなり、9月からは稗原会館で「稗原ほっこりカフェ」が始まり、有人の朝山支店でも女性部による「年金カフェ」が開催されました。また違うブロックの上津会館でも令和6年1月から「上津笑みちゃんカフェ」が始まりました。お互いに行き来し合い、いいところを取り入れたり、各カフェで工夫したりと、地域の憩いの場になることはもちろん、部員の生きがいの場にもなっています。

こうして各支部同士のつながりが強まったように思います。かつて災害に見舞われ犠牲者も出ている南部ブロックでは毎年防災研修会を開催しています。令和5年の研修会は家の光9月号付録「安全・安心 見守り貼」を使って、クイズ形式で出題し、各グループ毎に回答を考え発表していただきました。また手話サークルの皆さんに、耳の不自由な方への災害情報や避難方法の伝え方について実践を交え説明していただき、障害のある方への災害時の対応について考えるきっかけとなりました。こうした活動を1月に開催されたJA全国女性大会で乙立支部の今岡千恵子支部長が発表されました。その時に石川県の方々とも交流し、こうしたつながりから元旦に発生した能登半島地震の被災者に思いを寄せ、チャリティー杵つき餅販売を行う事にしました。女性部員をはじめ地域の皆様にも協力していただき、400パックのお餅を販売。会場ではバザーやフードドライブ、カフェも実施し地域をあげてのイベントとなり、お互いの絆、結びつきがさらに強くなりました。高齢化や女性部員減少とマイナス要因も沢山ありますが、みんなが笑顔で楽しく楽しく活動して行きたい、それを応援して行きたいと思います。

声を聴くことを心がけて!!

愛知県 J A あいち中央 新安城支店

岩井 ゆかり

今年の活動テーマは「対話運動をその先に繋げるアクティブメンバーシップ」「対話から繋ぐ」を継続しながら「活動と事業」、「活動と活動」そして「意思反映、参画」へ繋ぐ活動へと決まりました。そこで、多くの方と関わり話をする機会を設けるために、今年は以下の3つの項目に重点を置き取り組みました。

一つ目は、SDGsを意識した活動です。

「もったいないから何かに使えないかなあ？」という会話から、再利用を意識して考え、『家の光』の記事を活用して端切れで作るリースや、玉ねぎの皮で染める玉ねぎ染め、Tシャツを糸状にしたTシャツヤーンで作る足ふきマットなどの講習会を開催しました。色褪せて着られなくなってしまった服を染め直して、また新たなイメージで着られるようになっていたり、着なくなったTシャツが足ふきマットに変身して再利用出来たり、「思い入れのある物がまた違った形になり利用できるなんてエコだしごみの軽減にも繋がるし凄く良いね」と喜んでいただけ、Tシャツヤーンのマットは、自分の使いたい大きさにしたり、2個作ったりする方もいました。各自ができる事からSDGsに取り組む意識が変わってきたよう感じます。

二つ目は、次世代の活動です。

フレミズの森は本部企画も含め年度末までに8回開催します。11月に開催したアフタヌーンティーが大好評で、スコーンやサンドイッチ、それにちょっと珍しい紅茶を用意し楽しんでもらいました。スコーンは地元きぬあかりからできた小麦粉を使い、サンドイッチはらっきょ酢を使い、家にあるものを使ってもできるので胡瓜が沢山出来た時の消費にも良いねと好評でした。

次世代企画では、厚生連を講師に迎え親子料理教室を開催し、この時に参加してもらった方もフレミズの森の会員になっていただけました。

会員募集は他にも窓口に来店した際や、講習会に参加された時に話をしたりして、2月現在では31名になり、前年度より5名増えました。

新たに会員になってもらった方も、楽しく色々な活動に参加してもらえ良かったです。対話から繋ぐ事を目的に、参加された方にはいつも「どんなことやってみたい？」など、様々な時に声をかけ、会話の中からニーズを聞き出します。

なかには料理が苦手だけど皆で作ると楽しいから参加して良かったとか、レシピを見てもよくわからない工程も体験できて良かったなど参加された方の嬉しい声も届いています。フレミズの森では興味のある企画に参加してもらえるように、色々

な企画をしていますがやはり 1 番人気は料理だと思うので次年度に繋げていきたいと思えます。

三つ目は、「しんあんレディース」の活動です。しんあんレディースの会議ではいつも様々な意見がでます。

サークル代表者も多く、その中で改善して欲しいという意見があり、会議室の利用申込方法や書類の見直し、名簿の整備も行いました。

支店まつりでは、会議で内容を検討し、「さつまいもご飯」と「鬼まんじゅう」作りが決まりました。そのブースで募金箱を設置し、集まった募金と支店まつりの売上の中から、コドモノダイドコロ SORA さんに、でんまあとで使ってもらえるようにふれあい商品券を寄付しました。

文化祭では日ごろのサークル活動の成果を皆さんに見てもらえるように作品展を開催し、絵手紙やつるし雛など 6 サークルが出展しました。

出展していないサークルの代表や女性総代の方達も、受付や会場整備など参加していただけ、去年の反省を生かし、「ポスターを作って事前に目立つ所に貼っておこう!!」など様々な意見が出て改善しました。皆で創り上げた文化祭は大盛況でした。

さらに今年は、家活エコバックコンテストの展示も一緒に行い、入賞作品の発表もしました。家の光記事より 10 点の作り方も紹介しました。SDGs を意識し工夫されたエコバックが 21 点も出展され、思いの詰まった服や傘をリメイクした素晴らしい作品でした。来場された方も興味津々で見ただけ、会話も弾みコミュニケーションを取る良い機会ができました。

今年度移動したので、サークル活動中に挨拶をしに行ったり、色々な講習会やキャンペーンの案内を持って行ったりしお話ができる機会を増やしました。

その中の会話から自動車共済の話や、組合員加入の利点など普段とは違った雰囲気気分で気楽に話す事ができ、他社から自動車共済を変えてくれたり、出資をして自分も組合員になってもらえたり、対話から事業に繋げる事ができました。

話をしてみると、まだまだ伝わっていない事も多いので、今後も対話を大切にし、どんどん会話をしニーズを読み取り、事業を理解していただき、総合事業への橋渡しができるようにしていきたいです。

活動から事業・活動・参画へ繋ぐために仲間作りの輪を広げ、楽しく活動をしていながら、気軽に相談できる存在になり、JA ファンをもっと増やしていきたいです。

生活担当ではないからこそできる家活

福井県 J A 福井県 春江支店 共済課
笹原 久美子

生活担当者は「家の光」をテキストとして、日々の生活事業や女性部活動に取り組んでいると思います。私は支店の共済課に所属し、L Aとしての渉外活動に励むとともに、近年取り組んでいるのが「家の光ディスプレイコンテスト」です。令和3年に初めてチャレンジして賞をいただいたことをきっかけに、ここ3年間ディスプレイを作成してきました。

1年目は、かわいい J Aバンクのキャラクターの力を借りて、「家の光」を知ってもらうことをメインに展示をおこないました。2年目は、「家の光」に掲載されている記事を活用して、実際に自分で作った小物などを展示しました。そして3年目の今年は、今一度、原点回帰しようと思い、「家の光」そのものに目を向けてもらうことを目標として、ディスプレイをおこないました。

「家の光」の内容が良いということは、永年購読している方は知っていると思いますが、購読していない人たちからすると、内容もわからないし「家の光」という誌名自体が、どこか聞き慣れなれない単語です。「家の光」を知ってもらうためにはどうするかを考え、ふと目についたのが、吉沢亮さんが表紙の「2023年9月号」です。最も人目を引く「家の光の表紙」をメイン展示にすることをひらめきました。

1～12月号の表紙をすべてカラーコピーして、さらにラミネートをしたものを展示パネルに貼り付けました。すると、スター勢ぞろいという感じで、とても華やかな雰囲気になりました。

それから、支店長の許可をもらい、今回の展示場所を、来店者が最初に入る玄関正面スペースと定め、表紙を貼り付けたパネルを置いてみました。これを見た他の職員から、「家の光」冊子本体も一緒に置いた方が良いとアドバイスをもらったので、パネルのすぐ下に机を置いて設置しました。

せっかくのディスプレイなので「家の光」をもっと強くおすすめしようと思い、支店の職員12名にお願いし、各号のおすすめポイントを手書きで、書店POP風に作ってもらうことにしました。みんな快く書いてくれました。展示してある「スターの表紙」に、職員手書きの「おすすめポイント」を貼ったところ、表紙写真だけの場合より、積極的提案型の展示となりました。

また、カフェなどにおいてあるブラックボードを使い「家の光の12月号」の記事の概要を書くことにより、具体的に12月号の内容も紹介しました。

当支店は組合員の方から組合員外、小さな子供からご年配の方まで、多様な立場の幅広い世代の方々が来店する支店です。もっと注目してもらうにはどうしたら良いかを考えた結果、展示パネルのまわりに風船を散りばめることにしました。風船を飾ることで、当然子供たちは近寄ってきて手に取ります。そうすると、子供たちの保護者の方も、そのほかの方々も、風船に引き寄せられて近寄り自然に「家の光」を手にとるという結果になりました。

さらに、このディスプレイコンクール以外に、もっと知ってもらうにはどうすればよいかを考えました。ディスプレイは窓口に来店する方だけにしか効果がありません。そこで、3ヶ月に1度発行する「支店瓦版」を活用しようと思いつきました。

今年の瓦版担当は私なので、家の光の記事や女性部活動の記事を、今まで以上に多く載せることにしました。瓦版は、全組合員宅に配布するもので、支店活動やキャンペーンのお知らせなどが記事となっています。

瓦版は、案外多くの方が読んでいるようで、LA活動で組合員さんのお宅を訪問すると「瓦版の記事を読んだよ」と、声をかけていただいたりするようになりました。支店の「家の光ディスプレイ」や配布した「瓦版」を話題の糸口として、また次の展開へスムーズに進んでいけたりという結果も得ました。

最近では、職務権限が徹底され、自分の担当ではない業務にはまったく手を出さない風潮があります。しかし、担当じゃないからこそ、良いアイデアを思いつくこともあります。この「家の光ディスプレイ」のように、手を出してもよい所は、多いに手を出しましょう。

これからも、生活担当ではないからこそできる「家の光の普及・活用」に、可能な範囲で取り組んでいきたいと思えます。

JAの礎『家の光』

鹿児島県JA南さつま 総合対策部 暮らし広報課

西尾 あかね

「家の光」をどうすれば、購読・活用してもらえるのか。

まだ、生活指導員になりたての頃、家の光の普及、活用は私たちの仕事。先輩指導員も女性部の活動で記事活用していたので、私たちにとって必要な本であることは、すぐにわかりました。

そこで何か女性部で家の光を使った活動はできないかなと考えて、一人の支部長さんに料理教室の提案をしました。すると、「忙しいあなたが本当にできるの？」という返答でした。それでも、日時を決め、集落の公民館を会場に、10名ほど集まっていたいただきました。家の光から4品ほどのメニューをチョイス。材料、調味料を持って、料理教室を開催。なにもかも初めてでしたがレシピを説明してみんなで調理を始めました。そこはベテランのお母さんたち。テキパキと料理を仕上げていきます。試食をしながら今日の感想を聞いてみると、「みんなで集まって楽しかった」、「またやりたい」とのこと。毎月開催が決まり、あれから25年。今もなおその活動は続いています。その時、家の光レシピを使うので、購読をお願いしました。すると一気に8部の増部！その取り組みを聞いた他の支部長からも声がかかり、毎月3カ所での料理教室開催となりました。参加には家の光の購読を条件にしました。しばらくすると、女性部が解散して活動していない地域の方から手芸教室や料理教室をしてもらえないかとの話があり、それをきっかけに村原支部と万世支部が復活し、会員増にもつながりました。また、組織活動を通じて協同することの大切さをかみしめるよい機会となっています。

女性部活動の総会や役員会はもちろん、家の光大会では必ず読書会を行い、共同学習には、手芸などの記事を活用し出席者全員で作品を仕上げ、作品展示なども発表の場を提供することで作品づくりのへのモチベーションも上がり、次の活動のヒントが得られると好評です。女性大学のカリキュラムには必ず家活を1講座入れたりと、家の光購読者の「ひかりサークル」では、毎回家活のカリキュラムを企画するなど、できるだけ、購読している方の本を活かすように心掛けています。

しかし、毎年組合員の高齢化や職員の退職など、どうしても部数が減少します。職員全員での普及活動でも、生活指導員の仕事だからとなかなか理解をもらえないこともありました。

職員にも、家の光を読んでもらいたい、そして組合員に勧めてもらいたい。私がJAにはいった頃、その当時の生活指導員が手書きのチラシを準備し、ビニール袋

に本と一緒にに入れて配布していたのを思い出しました。

そこで、組合員へ家の光を届ける時に、メッセージカードと一緒に配布することにしました。手書きは苦手なので、毎月協会から配信される読みどころを盛り込み、パソコンで作ります。JAの掲示板に載せ、全職員が活用できるようにしました。

また、女性部向け家活奨励金要領を作成。グループで集まった時に、料理や読書会など家活をしたら、購読者の人数に対し、100円ずつ支払うものです。できるだけ購読していただくようお願いし、増部につながりました。

自分達のグループ活動の中で記事を使ってもらう自己申告制です。半年毎に支払いますが、活動費の助けになると、毎月の家活につながっています。令和6年度からは、別組織の助け合い組織の活動にも使えるようにしました。

職員向けには、とにかく袋を開けて本を開いてほしいと、「家の光クイズ」をする事にしました。本が届いても、袋のまま積まれているのをみると、悲しくなります。正解者の中から抽選で商品券が当たるようにしました。

さらに今までも広報誌には体操や菜園の豆知識など掲載してきましたが、そこへ「家の光クイズ」を毎月掲載することにしました。広報誌の最後のページにはクロスワードパズルの応募はがきをつけていますが、そこに「家の光クイズ」の回答欄も盛り込んで両方応募できるようにしました。正解者の中から抽選で5名に商品券が当たります。クイズは3問。応募者も徐々に増えてきました。中には未購読者もいるので家の光の宣伝効果も狙っています。これが購読につながれば大変うれしいと思います。

ご高齢の女性部員さんから、昭和の時代、生活改善の教科書として読まれていて、モンペなど自分たちで縫って着ていたとよく伺います。私たちがいつも本を持ち歩き、「家の光を開き、活用することが当たり前」の景色を作っていくことが必要です。そして、これからは男性も参加できる組合員向けのサークル活動へ。もちろん、家の光も使い、購読していただいて家の光のファンをたくさん作りたい。そしてJAのファンを作りたい。家の光はJAと組合員・地域住民のつながりをもっと強固なものにするための教科書だと思います。

教育文化活動はJAの土台だと思っています。協同組合組織の存続はある意味そこにかかっているように思います。私たちはその大きな役割を担っているのです。